

## 顔真卿 早年の楷書碑誌

横 田 恭 三

### 要 旨

顔真卿(七〇九〜七八五)、字は清臣。琅邪臨沂(いまの山東省臨沂県)の人。顔真卿の家系は代々著名な学者を輩出しており、また能書家の家系でもある。彼は「忠義の人」「剛直の人」として評価され、またその書も北宋以後、しだいに評価が定まり、現在に至っている。顔真卿の書いた碑誌の数量は、同時代の書家と比べて圧倒的に勝る。現在、楷書碑の原石とされるものは、「多宝塔碑」「東方朔画贊碑」「鮮于氏離堆記」「郭氏家廟碑」「麻姑山仙壇記(大字本)」「元結碑」「宋璟碑」「李玄靖碑」「顔勤礼碑」「顔氏家廟碑」などが挙げられる。『顔真卿志』には、代表的なものを二〇種、その他の碑帖百種以上を載せ、その書の特徴を、前期(五十歳以前)・中期(五〇歳〜六五歳)・後期(六五歳〜)の三期に分類している。なかで最も早年の碑誌は、四四歳の時に書した「多宝塔碑」であった。が、近年連続して二つの墓誌が出土した。一九九七年、偃師から出土した「郭虚己墓誌」(四二歳の書)、さらに二〇〇三年秋、洛陽龍門鎮から出土した「王琳墓誌」(三三歳の書)がそれである。顔真卿は漢・晋以来の書法を一変したという。どのように一変したのかを明確にするためには、彼の書を年代ごとに精査する必要がある。本論考では、顔真卿の新出土の碑誌をもとに、前期(五〇歳以前)の書風を検討し、彼の書法を詳細に分析したい。

はじめに

天宝十三年(七五四)冬、拳兵の時機を窺っていた安祿山は、顔真卿の動向を探る目的で、腹心の部下の平冽ら四名を平原に派遣した。この陰謀を察知した顔真卿は、安徳県(いまの山東省陵県)にある東方朔神廟に彼ら四名を招いて大いに歓待してみせた。天宝十四年(七五五)、安祿山率いる二〇万の兵力が河北を席卷したとき、玄宗は「河北二四郡に一人の義士もおらんのか」と嘆いたというが、このとき顔真卿は一族とともに、逆賊安祿山に敢然と立ち向かった。その戦いの中であえなく命を落とした甥 顔季明に捧げた甲辞「祭姪文稿」はつとに有名である。顔真卿(七〇九〜七八五)、字は清臣。琅邪臨沂(いまの山東省臨沂県)の人。顔真卿の家系は代々著名な学者を輩出しており、また能書家の家系でもある。彼の一生は「忠義の人」「剛直の人」として評価され、またその書も彼の生き方と相俟って、北宋以後、大いに流行し、現在に至っている<sup>(1)</sup>。

顔真卿の手になる碑誌は、同時代の書家と比べた場合、その数量において圧倒的に勝る。現在、楷書碑の原石とされるものは、「多宝塔碑」「東方朔画賛碑」「鮮于氏離堆記」「郭氏家廟碑」「麻姑山仙壇記(大字本)」「元結碑」「宋璟碑」「李玄靖碑」「顔勤礼碑」「顔氏家廟碑」などが挙げられる。このなかで最も早年の碑誌は、四四歳の時に書した「多宝塔碑」であった。が、近年さらに若い時期にあたる二つの墓誌が出土した。一九九七年、偃師から出土した「郭虚己墓誌」<sup>(2)</sup>(四二歳の書)、さ

らに二〇〇三年秋に、洛陽龍門鎮から出土した「王琳墓誌」<sup>(3)</sup>(三三歳の書)がそれである。蘇軾は「顔魯公の書は雄秀独出して古法を一変すること、杜子美の詩の如く、格力天縱にして、漢魏晋唐以来の風流を奄有せり。後の作る者、殆どまた手を措き難し。」と述べている<sup>(4)</sup>。つまり、顔真卿は独り漢・晋以来の書法を一変したというのである。どのように一変したのかを明確にするためには、彼の書を年代ごとに精査する必要がある。

顔真卿は早くに父を失い、母方の殷氏のもとで養育された。顔家と殷家とはしばしば婚姻関係を結んだことで知られる。殷令名は歐陽詢・虞世南に匹敵すると称された書法の名家である。また、彼は張旭に書法を伝授されたという師承関係も見逃せない。顔真卿の書法の風格は『顔真卿志』によれば、前期(五〇歳以前)・中期(五〇歳から六五歳)・後期(六五歳以後)の三期に分類されている<sup>(5)</sup>。機会を得て現地を訪れ「郭虚己墓誌」「多宝塔碑」「東方朔画賛碑」「郭氏家廟碑」「元結碑」「宋璟碑」「顔勤礼碑」「顔氏家廟碑」をそれぞれ参観することができたが、この内で前期にあたるものは「郭虚己墓誌」「多宝塔碑」「東方朔画賛碑」である。これに新出土の「王琳墓誌」を加えて書法の風格を眺めてみると、前期をさらに細分化する必要があることに気付かされる。本論考は前期に該当する三〇〜四〇歳代の碑誌を中心に考察研究したものである。

### 一、早年の碑誌とその現状

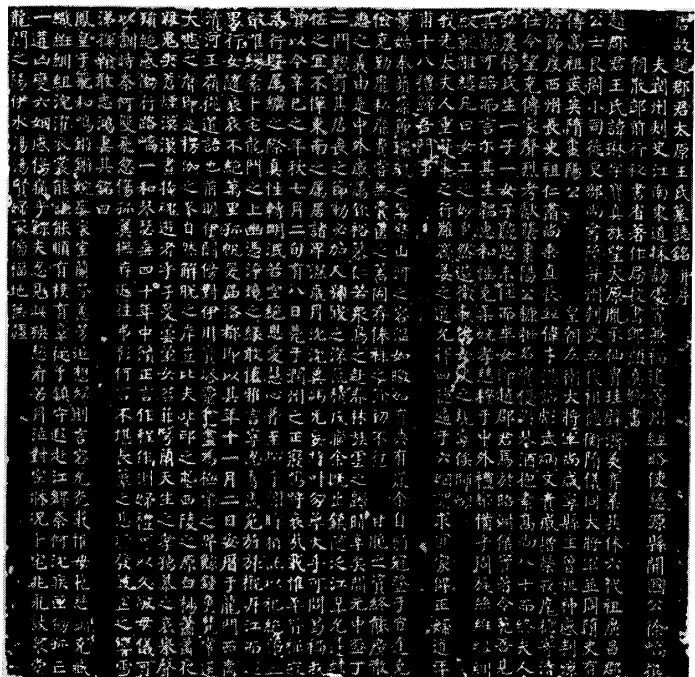
顔真卿の手になる碑誌で、前期にあたる(五〇歳以前)のものは現在

四種見ることができるとは上に述べた。ここでは、その四種の概要説明と現状について述べる。なお、顔法の特長を説明するための用語の整理をしておく。『蚕頭燕尾』は後世の俗称で、起筆と収筆部を具体的に形容したものである。この払いを磔法(一)と(二)という。挑剔とは趯法(一)(二)のことである。また按筆とは横画の収筆部の抑えを指す。

1. 王琳墓誌(開元二十九年・七四一年)〔図一〕

何漢儒「顔真卿早年書作―唐王琳墓誌」によれば、二〇〇三年秋、洛陽龍門鎮張溝村から開元二十九年(七四二)に刻された(王琳墓誌)が出土したという。徐嶠の撰・顔真卿の書である。徐嶠は王琳の夫であり、新旧唐書(新一九九・旧一〇二)に伝がある。徐嶠は、天寶元年(七四二)に卒しているので、亡くなる前年の撰文にあたる。墓誌の標題は「唐故趙郡太原王氏墓誌銘并序」、墓誌の大きさは九〇×九〇、五cm。三二行、満行で三二字。石質は石灰岩質である。四側に雲紋飾を施し、その一面には「開元廿九年記」と刻している。ただし、正式な発掘報告を見ないため、何氏の報告と拓本の図版から全体像を窺うだけである。何氏の論考が出された直後、文字の稚拙さから偽刻ではないかという意見も聞かれた。「多宝塔碑」より一二年、「郭虚己墓誌」より九年も早年の作になる。一見してわかることは、「多宝塔碑」「郭虚己墓誌」二種に見られるような顔法の基礎は未だ手中にしていないうことである。それだけに偽刻とするにはかえってためらわれる。二〇〇五年夏、郭虚

図一 王琳墓誌



己墓誌を収蔵している偃師商城博物館を訪問した際、何氏の論文発表の経緯を知っている王志遠副館長に、偽刻ではないかとの意見もあることを踏まえて直接質問したのであるが、王副館長は出土の経緯を承知しているらしく原則であることを確信していた。よって、ここでは原則と見なして考察を進める。

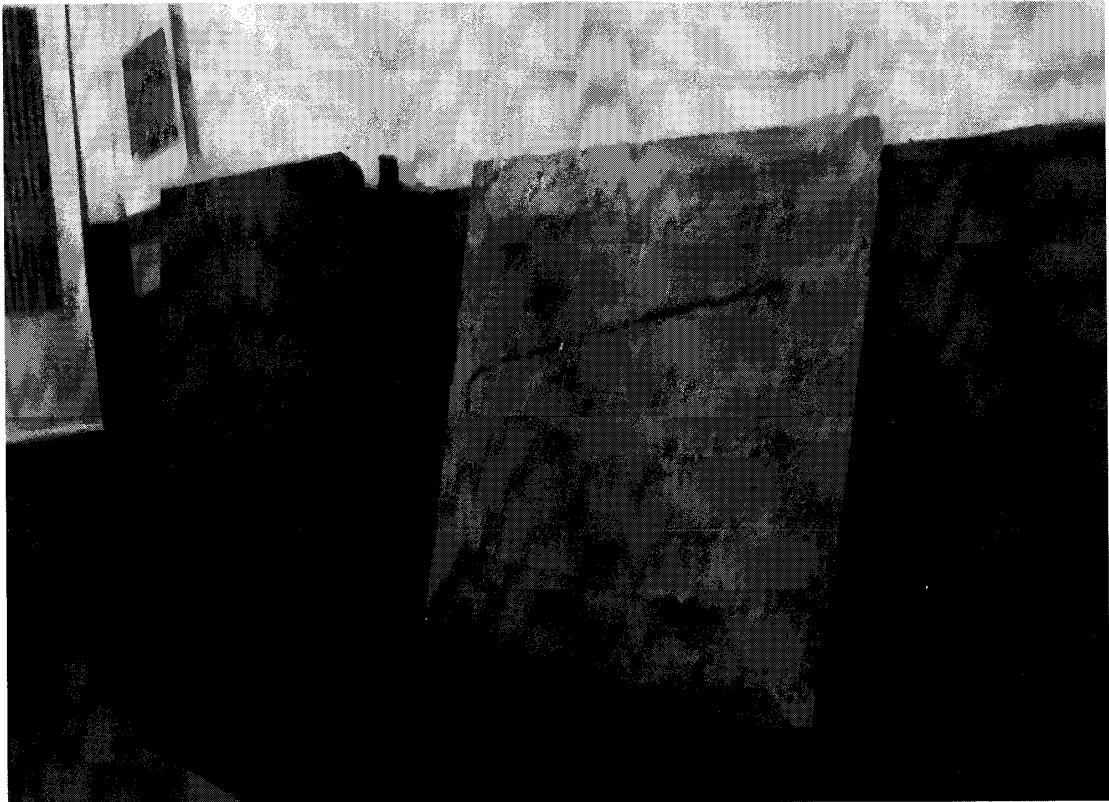
この墓誌の撰文者 徐嶠は、開元中に集賢院学士・中書舍人となり、名文家として聞こえた人でもある。誌文によって王琳と徐嶠の二人は夫婦であったことがわかる。一般に碑誌の撰・書者は、その依頼者の身分や家柄に応じて決まるといってよい。書丹者の顔真卿は当時三三歳で

あったが、その五年前の開元二四年（七三六）にはすでに朝散郎、秘書省著作局校書郎を授かり、要職についている。何漢儒氏は、当時にあつて顔真卿の書法がすでに流伝していたことを指摘した上で「徐嶠はきわめて早い段階で書壇の奇才を見出し、〈王琳墓誌〉によつて顔真卿早年の書の魅力を味わわせてくれた」と称えている<sup>(8)</sup>。これまでの顔真卿伝世の楷書中、最も若書きは〈多宝塔碑〉（七五二）、顔真卿四四歳の作であつた。その後、一九九七年、河南省偃師市から〈郭虚己墓誌〉が出土したことは前述した通りであり、〈多宝塔碑〉と〈郭虚己墓誌〉の二碑誌を比較してみると多くの共通点が窺える。樊有昇・鮑虎欣氏は〈郭虚己墓誌〉と〈多宝塔碑〉二碑誌を比較し、〈多宝塔碑〉の字体はやや肉厚の豊かさが目立ち、〈郭虚己墓誌〉の字体はやや細線を用いていてスマートさが目立つ以外は、その風格は基本的には一致していると見ている<sup>(9)</sup>。一方、王琳墓誌に関して何氏は「王琳墓誌の）結体は平正、疎密に意を配り、結字はすぐれ、用筆法に根底がある。」といい、われわれにその青年時代の書法が非凡であつたことを理解させてくれたと指摘するが、〈王琳墓誌〉をつぶさに観察してみると、顔法にはほど遠くその趣においてかなり見劣りすることは否めない。この点については第三章「四碑誌における書法の比較」で述べることにする。

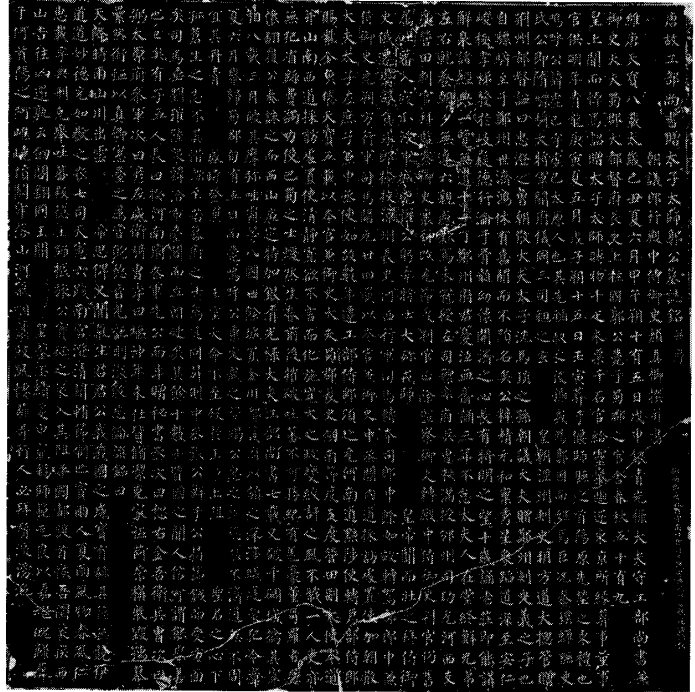
2. 郭虚己墓誌（天宝九年・七五〇年）〔図二A・B、図三〕

唐工部尚書であつた郭虚己の墓誌である。河南省偃師市首陽山の唐代

図二A 郭虚己墓誌銘手前が蓋、奥が墓誌

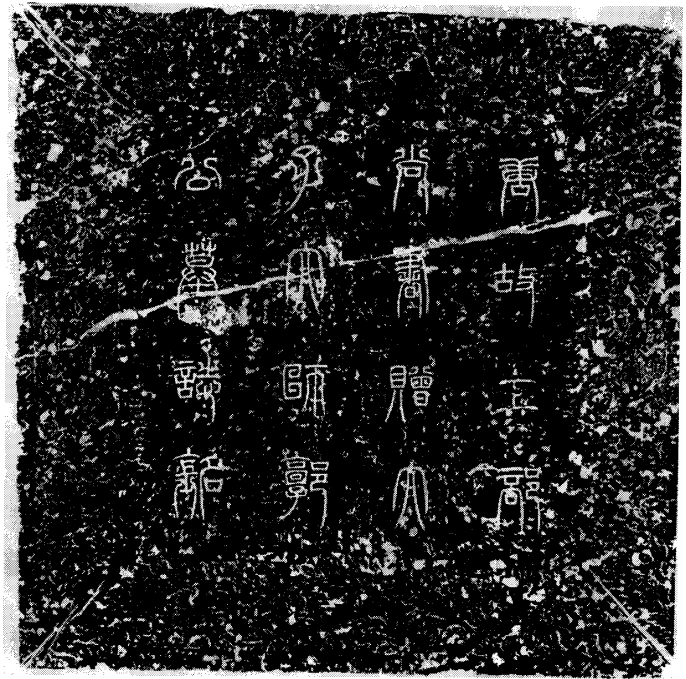
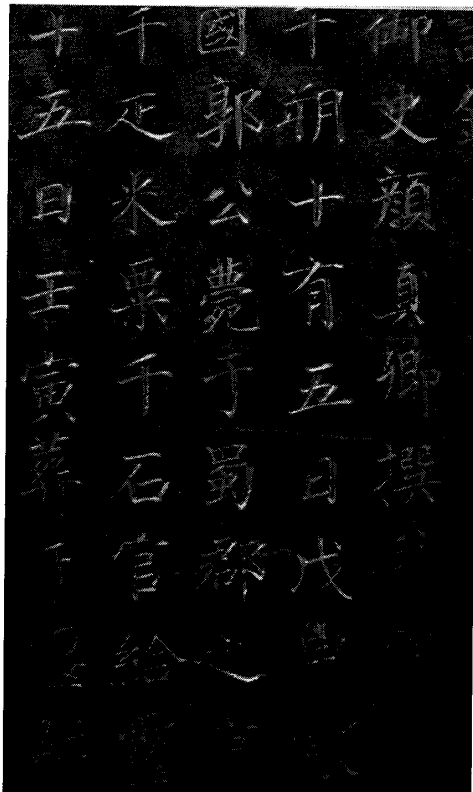


図二 B 郭虚己墓誌と蓋



洞墓中より出土した。顔真卿の撰ならびに書。張庭詢檢校。石は青石質である。誌石は一〇七×一〇四cm、厚さ一六cm。四辺に瑞獸、海石榴、牡丹花紋を刻している。誌文は楷書。三五行、滿行三四字、界格を施している。新旧唐書には郭虚己の伝がないが、断片的に拾うことが可能なため、正史の欠を補うことができる。蓋には、篆書で「唐故工部尚書贈太子太師郭公墓誌銘」の一六字を刻している。篆蓋の書者は記されていないが、劉濤氏は、署名の重複を避けたために記さなかったと見て、蓋の書者は顔真卿自身であると断定している<sup>(1)</sup>。顔家は代々篆籀、草隸に堪能な人材を輩出しているだけでなく、顔真卿自身も篆隸書法をよく学ん

図三 郭虚己墓誌銘



であり、たとえば東方朔画贊碑の題額を書いている。顔真卿の手になる篆蓋と見ることはけつして的外れではない。

郭虚己墓誌の出土は大いに注目された。その理由は三点挙げられる。

一つは顔真卿四二歳のときの書で、〈多宝塔碑〉より二年早く、伝世中最も早年の書といえること。二つ目は、顔真卿の伝世する碑帖墨跡（およそ三〇種類）の多くが摩滅や剥落を受けているが、地下に納められていた郭虚己墓誌はほとんど摩滅を受けていないこと。三つ目は顔法の特徴である、いわゆる「蚕頭燕尾」の筆法が垣間見られ、〈多宝塔碑〉と共通点が多いものの、ときには虞世南や褚遂良のような用筆および結構が看取されることから、顔真卿の書法の変遷を知る好材料であること。以上の三点である。なお、その刻書時期については、樊有昇・鮑虎欣氏は、天宝八載（七四九）と述べているが、劉濤は五つの理由を挙げて、天宝九載（七五〇）、顔真卿四二歳の書と断定した。<sup>12)</sup> 誌文に「天宝八年」のほかには翌年という記述があることから、後者の論に理がある。

また、宋の趙明誠『金石録』に「唐工部尚書郭虚己碑・顔真卿撰並正書」の記載があるように、郭虚己の墓葬には石碑と墓誌の二者が揃っていたことが知られている。<sup>13)</sup> しかし、その後碑は失われてしまい、現在は不明のままである。

郭虚己墓誌と蓋は現在、偃師商場博物館の石刻陳列室に保管されている。参観することができる（図二A）。なお、誌面の十二〜十六行目の上部に楕円形の痕跡が見えるが、出土時誌石の上に鉄の鉢が置かれていたためであり、下部の断裂線はブルドーザーによって受けたもののだとい

う（王副館長談）。ちなみに、この陳列室には近年出土の〈肥致碑〉（後漢・一六九年）や〈侍廷里父老僧買田約束石券〉（後漢・七七年）など数十点が展示されている。

### 3, 多宝塔碑（天宝十一年・七五二）

勅令により、楚金禪師が長安の千福寺に舍利塔を建立した経緯および天台宗を顕彰したことを記した碑である。天宝十一年（七五二）、陝西興平県千福寺において刻され、明代に秦藩が西安俯学に移し、現在は西安碑林の第二室に保管されている。この碑の首行には、「大唐西京千福寺多宝仏塔感応碑文」と刻している。岑勛撰、顔真卿の書。徐浩の題額（隸書）。碑石は二三九×一二七cm。三四行、満行六六字。良好な石質に二千に近い文字を精刻したもので、鋒鋦はいまなお真新しく感じるほどである。顔真卿四四歳の時の楷書で、これまで伝世碑誌中では最も早年のものであった。結構は方整・緊密で、横画の起筆収筆に筆勢を加え、豎画に力点を置いて書いている。どの点画も揺るぎない筆法である。晩年の書に多見される向勢と蚕頭燕尾の基礎はすでにできあがっているといえる。唐代の経生が書したものにこの風韻に近いものが散見される点を踏まえれば、こうした筆法が当時広い裾野を持っていたことが推し量られる。

4. 東方朔画賛碑（天宝一三年・七五四）（図四・五）

漢の武帝に仕えた東方朔という人物の面に、西晋の夏侯湛（二二三～二九一）の賛文を加えたものを東方朔画賛という。王羲之に同名の細楷が集帖中に残されているが、顔真卿のこの碑とは文章に異同がある。

碑石は楷書で四面刻。原石で高さ二六一×一〇二cm、厚さ二二cm。碑陽・碑陰とも各一五行、両側は各三行、行ごとに三〇字、顔真卿の撰・書である。碑額は篆書で「漢大中大夫東方先生画賛碑」、陰額は隸書で「有漢東方先生画賛碑陰之記」と陰刻している。碑石は山東省陵県の人民公園内にある「文博苑」に現存する。

苑内には一九九二年八月一日に陵県文化局が建立した〈遷碑記〉が置かれていて、唐の天宝一三年に立碑して以来のことを詳しく刻しているので、主なものを以下に抜粋して示す。

この碑は、顔真卿が平原郡（いまの陵県）太守に任じられたときの書である。現在、省の重点文物保护单位国家一級文物藏品となっている。この碑は、天宝一三年（七五四）、古厭次城（いまの陵県神頭鎮）の東方朔祠廟内に建てられた。元の時、県城に移され、大堂の側に亭を建てた。清の康熙六年、地震によって亭は壊れ、碑は土中に埋まった。乾隆壬子（一七九二）、県令の汪本荘は亭を建て、そこに居住した。解放後、さらに保護が加えられ、一九六三年、省は碑亭の修理を發した。一九八三年、県の文化館に遷して保護した。

一九八七年、国家文物局の専門家を招き、碑身に新たな技術を施し、

保護処理を行った。一九九一年八月一日、東方朔博物館に遷し、亭内部に珍藏した。云々…

とある。

この〈遷碑記〉によれば、苑内に現存する〈東方朔画賛碑〉は原石ということになる。この碑が原石か否かについて、これまでいくつか議論があるが、本論考とは関連が薄いのでこれ以上深入りしない。二〇〇五年夏に訪問したときは苑内の数カ所で工事がなされ、碑石には式典等で使われたと思われる紅色の垂れ幕の布が保護用としてかけられていた。管理人の王迅氏と交渉し、碑面を直接観察させてもらった。石は全体に剥落がひどく、それを補う目的で殆どの文字に深い剝落跡が残されている。特に碑の下半にあたる部分は、殆ど文字を読み得ないほど剥落していた。王迅氏の話では一〇年に一度の割合で剝落しているのだという。下半部は激しく剥落した碑面の上から、さらに深く彫り込んだ刻面がかって痛々しかった。

苑内にはこのほか、〈漢太中大夫東方先生墓碑〉と〈唐光祿大夫太子太師刑部尚書魯郡開國公顔文忠公画像賛並序〉（清・同治元年・一八六二年）、翻刻された東方朔画賛碑の四碑が東方朔画賛碑の反対側に、苑内の中央には東方朔石像（一八六二年作）が置かれていた。また正面の廟内には、顔真卿石像が置かれていた。

二、楷書の特長とこれまでの評価

『顔真卿志』は顔真卿の手になる書に関して、代表的なものを二〇種、

図四 東方朔画賛碑のある文博苑入口



図五 東方朔画賛碑 碑陽





その他の碑帖（碑帖目録、碑帖存目）を百種以上を載せ、これらの書の特長を次のように三期に分類している。<sup>(14)</sup>

前期（五十歳以前）―書風の趣は堅実で骨力があり、強くしなやかな書風を求めた。初歩の「顔体風格」を確立した。

中期（五〇歳―六五歳）―安史の乱を経て、顔は生活の場を頻繁に移した時代である。この時期は、篆籀の筆法を執り、円転で蔵鋒、中鋒で渋滞する運筆に心掛けている。このプロセス中に顔真卿は大胆に法を変え、顔法を用いて自ずから新意を見出し出している。

後期（六五歳―）―成熟した書風に神奇な変化が加わる。円潤、豊腴中に自己の剛邁な気風を現して、一碑一面貌の異彩を放つ。

本論考では、顔真卿の早年の作、つまり前期（五〇歳以前）の書風を中心に検討を加えようとするものである。この前期に該当する作には、

〈王琳墓誌〉〈郭虚己墓誌〉〈郭虚己碑〉〈郭揆碑〉〈扶風夫子廟堂碑〉

〈多宝塔感応碑〉〈東方朔画賛碑〉〈謁金天王神祠題記〉の各碑誌が挙げ

られる。ただし、〈郭虚己碑〉〈郭揆碑〉の二碑は、もと河南省偃師市首陽山に建てられていたが、既に亡佚した。また、〈扶風夫子廟堂碑〉は、

残石として陝西華県に現存し、伝本で八行七〇余字を残すのみであるという説と大歴二年（七六七）に杭州に建てられたが、亡佚したという説など、諸説あつて定まらない。よって、ここでは除外する。ところで、

『顔真卿志』では、五〇歳以前の書を「強くしなやかな書風」と規定するが、三〇歳代の書になる王琳墓誌を見る限り、この見解は当てはまらない。ここに五〇歳以前を「前期」として一括することはやや問題を残

すことになる。

顔真卿の書の評価を以下にまとめてみよう。『唐書本伝』には「正草書を善くす。筆力は遒婉、世宝として之を伝う。」とある。これは、顔真卿に対する一定の見解であるが、一方で、「真卿の書は法有れども佳きところ無し。正に扱手並脚の田舎漢の如きのみ。」（李後主<sup>(15)</sup>）とか、

「（顔）真卿は褚遂良を学びて既に成る。自ら挑踢を以て名家たり。作用太だ多く、平淡天成の趣なし。…（中略）…大抵 顔・柳の挑踢は、後世 醜怪悪札の祖と為る。」（米芾<sup>(16)</sup>）と、顔法を褚法から出たものとし、

挑剔に対して独自性を現そうとしたが、作りすぎで趣がなく後世「醜怪悪札の書」という手厳しい評価を受けたことは周知の通りである。宋代初めに編纂された『淳化閣帖』に収められなかった理由はこの点からも推し量られる。のち、欧陽脩は、顔魯公の書は石に刻せるものが多く、

精粗の別があることを指摘し、その理由は「伝模鐫刻の工拙有るなり。」

と述べている。<sup>(17)</sup> 刻者の巧拙の問題は、とりわけ碑石より墓誌に顕著な差

が見られる。これは同一墓誌を複数の工人が担当することからくる問題であり、軽々には無視できない。<sup>(18)</sup> が、本論で採り上げる二つの墓誌はい

ずれも九〇cm―一〇〇cmを超える堂々たるもので、工人の優劣も吟味したであらうから精刻の類に入れられる。よって、巧拙の差は少ないと考え、この点に関してはこれ以上議論しない。「魯公は忠義天性に出づ。

もとよりその字画は剛勁独立。前跡を襲わず。」と、忠義心に厚いその人となりを見出し、剛毅遒勁の書風に重ね（欧陽脩<sup>(19)</sup>）、さらに黄庭堅が「唐の欧虞より後、能く八法を備えたる者は、ひとり徐会稽（浩）と顔太師（真

卿)のみ。然れども会稽は肉多く、太師は骨多し。」<sup>(20)</sup>と骨力の強さを称えて以来、顔真卿の評価はしだいに定まっていくな。

顔法といえは、楷書に顕著な「蚕頭燕尾」で代表される筆法を指す。<sup>(21)</sup>

但し、米芾は「(真卿の)真蹟、皆な蚕頭燕尾の筆無し。」<sup>(22)</sup>といい、この筆法が極端なものは造りものの感があることを指摘している。顔書の出自については、米芾は褚遂良をあげ、包世臣は「徂徠山般若經碑」をあげている。また、篆籀の筆法に基づいているという指摘も蘇軾・黄庭堅以来多く述べられている。西林昭一氏は、「顔真卿の運筆のリズムは、多宝塔碑の時期すでに、晩年の作にまで通ずる呼吸がそなわっている」といい、「東魏から北齊にかけての大字書法、さらに(曹子建碑)に代表される雑体書内の楷書に顕著な結構と筆意—これらが顔真卿の楷書の基盤にある」と指摘される。<sup>(22)</sup>また、王澐が「褚河南の書は、有唐一代を陶鑄す。稍や險勁なれば則ち薛曜と為り、稍や痛快なれば則ち顔真卿と為り」と、褚遂良が唐代全体の書を育成し、その書体風格をやや痛快に力点を置くと、顔真卿の書法になると指摘する。<sup>(23)</sup>とりわけ早年の作・王琳墓誌、郭虚己墓誌に褚法が顕著である。また、褚法のみならず、虞法や欧法に近いものも散見される。よって以下、典型的な用筆法の代表として虞法・欧法・褚法の三種の名称を用いて説明する。以下の比較で明らかにしてみよう

### 三、四碑誌における書法の比較

前述したように、『顔真卿志』にしたがって顔真卿の書の特長を三期

に分類すると、東方朔画賛までは早期の作と見なしてよい。が、王琳墓誌と東方朔画賛碑との間には一八年の開きがあり、実際のところ、東方朔画賛碑の書格は一見していわゆる顔法的要素が反映されている。この一八年間に書かれた四種の碑誌を比較することは、顔法が出来上がるまでのプロセスを検証する上で、少なからず有益であると考えられる。とりわけ、近出の王琳墓誌・郭虚己墓誌については詳細に述べることにする。まず、四碑誌を一覧表にまとめてみよう。

碑誌名	刻書年	撰書者名	所在地	官名と年齢	備考
1 王琳墓誌	開元二九年 (七四一)	徐喬撰 顔真卿書	河南省 個人蔵	校書郎 三三歳	墓誌九〇×九〇、五cm、 三三行、滿行三十字
2 郭虚己墓誌	天宝九載 (七五〇)	顔真卿撰・書 張庭詢檢校	河南省偃 師商城博 物館	監察御史殿 中侍御史 四二歳	墓誌二〇七×二〇四cm、 三五行、滿行三十四字。 側面に「天宝二十九 年」の刻あり。有蓋。
3 多宝塔碑	天宝一一載 (七五二)	岑勛撰、 顔真卿書	西安・陝 西歴史博 物館	武部員外郎 四四歳	碑石三九×二七cm、 三四行、滿行六六字。
4 東方朔画賛 碑	天宝一三歳 (七五四)	晋夏侯湛撰 顔真卿書・ 隸書題額	山東省陵 県文化館	平原郡太守 四六歳	碑石四面刻、二六× 一〇二cm、厚三二cm。 二五行、滿行三〇字、 両側各二行。

蘇軾は「顔公は法を變じて新意を出す」という。劉濤は「前期」楷書碑誌として①〈郭虚己墓誌〉／②〈多宝塔碑〉〈扶風廟碑〉／③〈東方朔画賛碑〉／④〈謁金天王神祠題記〉〈鮮于氏離堆記〉をあげ、それぞれ①～④の四類に分けている。これを受けて、「前期の楷書はおよそ三変。初唐名家の影を離れて一変、整整の法度より深雄円厚へ転向して二変。三変は欹側から平正となる。この変化の形は、方勁俊秀から円渾に

変化していったもので、結体の緊斂敬側を放棄して寛博平正に近づいた」と指摘し、顔真卿の変法は年五〇有余、時に七六〇年代であるとする<sup>(24)</sup>。しかし、四六歳の書である東方朔画賛碑にすでに顔法の要素が大いに現れている点から見れば、この変法が五〇有余歳と見るよりもさらに遡ることができるのではないかと考える。

ところで、初唐は楷書の様式美における完成期であり、結構は均整がとれ、規矩が備わった時代である。当時最も流行した書法は褚法で、褚の書を習う者は圧倒的多数であった。顔真卿も褚の書を習ったことは、米芾をはじめ、つとに指摘されてきたところであるが、褚法のみならず、虞法・欧法に近いものも散見されるといふ事実は大いに注目すべきである。このことは郭虚己墓誌と王琳墓誌の相次ぐ発見で窺えるようになった。

王琳墓誌の特長を具体的に指摘してみよう。一画中に抑揚を利かせた線が見られる。例えば、「四」「西」の左の堅画は起筆で抑揚をつけている(図六一①)。この用筆は王法や褚法などに往々に見られるものである。また、穏やかに引かれた転折部の用筆は、虞世南(孔子廟堂碑)を彷彿させる線質である(図六一②)。一方、結構が不安定でバランスを欠くものや稚拙さを感じられる文字がときおり含まれる(図六一③)。結構を扁平にした「吾」、中心がぶれる「祿」、拡散する「慈」、点画の均衡を失っている「歳」「儀」「曠」「憚」「伊」などである。顔真卿自身の力量不足から来るものであろうか、あるいは刻者集団に未熟な者が含まれていたものであろうか、にわかには断じがたいが、結構の扁平や中

図六

〈王琳墓誌〉

①線の中に絞りと開きの抑揚が見られる



②虞世南を彷彿させる穏やかな線質



③結構が不安定でバランスを欠くもの



④筆法の混在



心のぶれは、刻者というよりも明らかに書き手の問題であろう。次に図六一④の「正」「東」「其」字を検討してみよう。「正」の第五画目の収筆部であるが、(ア)はやや曲線的要素を含んだ線質である。(イ)は起筆は穏やかだが、収筆に向かうほどに筆を開ききちつと止めている。(ウ)は起筆をトンと打ち込み、筆を開きつつも抑揚をつけて止めている。(ア)は虞世南風、(イ)は欧陽詢風、(ウ)は第四画の起筆と連動した筆法から見て褚遂良風にそれぞれ近いといえる。また「東」の三画目の転折の書き方や「其」の第一画目と六画目の起筆の打ち込み方など

図七  
〈郭虚己墓誌〉  
① 重厚な堅画



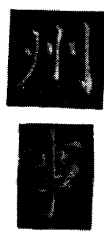
② 収筆部の抑え (按筆)



③ 趯法と磔法



④ 抑揚のある線



⑤ 背勢に引き締めた結構



も虞法・欧法の二家に分けられる。以上、三例を挙げただけであるが、筆法上から見た場合、初唐の名家の用筆が少なからず混在することは間違いない。一墓誌を刻する場合、複数の刻者によって制作されるということが知られている。したがって墓誌の書風を論じる場合、刻者の巧拙あるいは刻者の好尚によって、一墓誌中の刻風に差異が生じる可能性も考慮しなければならないが、王琳墓誌の場合、その風格の点で大きく違った書風になっていることは、この時期に顔真卿の書法がいまだ定まっていなかった証左となろう。

次に、郭虚己墓誌の特長を指摘してみる。この墓誌は王琳墓誌より九年後の作であるが、結構は堅実、線質には骨力があつて、顔法における初歩的風格が窺える(図七-①②③)。図七-④のように楮法を踏まえ

た抑揚のある線が見られる一方、欧法に見られる背勢に引き締めた結構も時折顔を出す(図七-⑤)。顔法に見られる転折から重厚に引く堅線、収筆に見られる按筆の抑えも顕著である。趯法と磔法については、これまでの実例でいえば多宝塔碑でその基礎が形成され、五〇歳以後に一段と顕著になる。郭虚己墓誌における顔法のリズムはまだ完全とはいえないが、「尚」「司」の趯法、「天」「還」の磔法(図七-③)などにその萌芽が感じられる。転折部において、王琳墓誌にみられたような虞法(穏やかな用筆)は影を潜め、横画から堅画へ移るとき、一端筆の腹を落として、重厚さを出すようになる。また王琳墓誌にみられたような稚拙な結構は少なくなり、横画の運筆が軽快なリズムを形成し、細線を利かせた横画と肉厚な堅画の対比をかなりはつきり意識しはじめている。

次に多宝塔碑の特長を指摘してみよう(図八)。前者二墓誌と比較すると、重厚な堅画が増加する。横画の按筆、あるいは趯法がはつきりと見られるようになり、字形に幅が出るだけでなく、横画における三過折のリズムがより大胆になる(図八-③④)。この用筆法のリズムは王琳墓誌には全くなく、郭虚己墓誌から後の作に見られるようになり、多宝塔碑でさらに顕著になる。何漢儒氏は「この多宝塔碑には顔書の後半に現れる蚕頭燕尾の筆法の基礎が既に完成している」といい、具体的には「横画が連続する画は細線が主で、起筆と収筆でリズムを取り、全体を押さえている。」と指摘している<sup>(25)</sup>。図八-⑤には、複数の字体の用例を掲げた。「徳」「歳」は一画増減がある。「為」は三種の書き方を用い、「所」「分」は隷書をベースに置いたものが含まれている。「聖」「塵」

図八

(多宝塔碑)

① 重厚な堅画



② 蚕頭燕尾の筆法



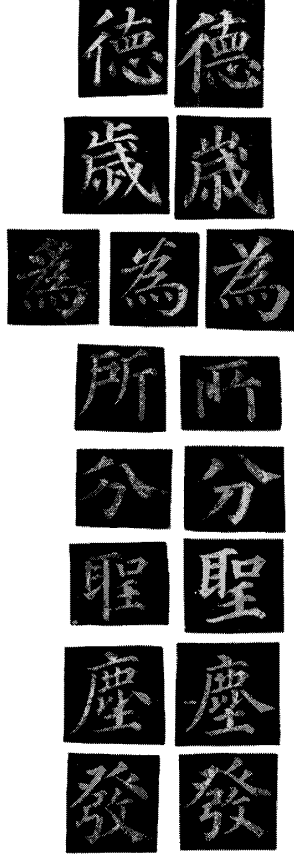
③ 収筆の抑え(按筆)



④ 趯法



⑤ 複数の字体



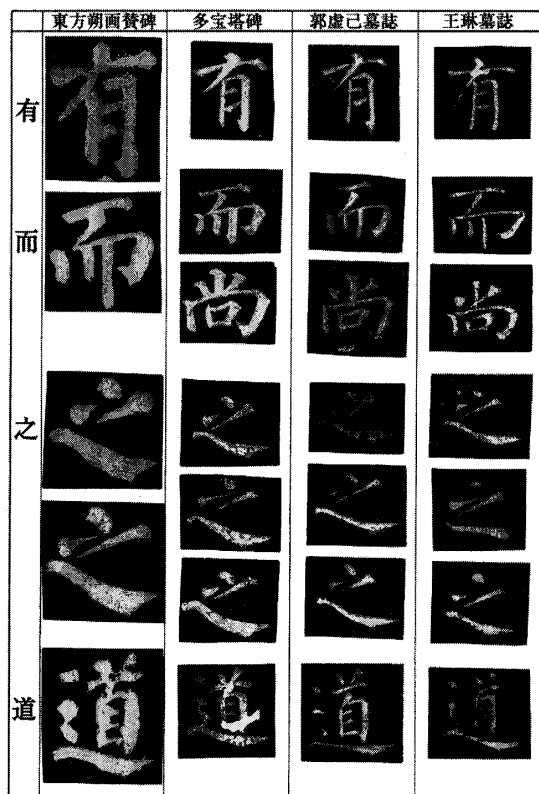
「發」は点画の配置や払い方の違いである。これらは顔真卿の用字意識と深くかかわっていると考えられる。

郭虚己墓誌は王琳墓誌より九年後の作になるが、この頃には横画「一」の収筆における按筆や、磔法の特長が顕著にみられるようになってくる。また横画から堅画への転折部でも太細の変化が強調される。王琳墓誌にみられた堅画の起筆の抑揚や極端な細線はなくなる。ただし、長く上下を貫く堅画にはまだ送筆部における絞り込みがみられ、褚法を

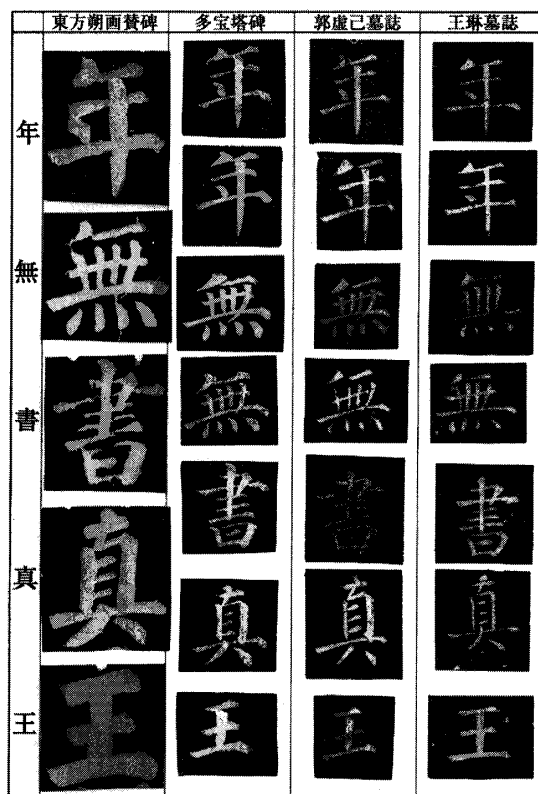
学んだ痕跡が感じられる。

東方朔画賛碑の特長を見てみよう。この碑は、幾度となく改刻を経てきているため、伝来する宋拓であっても、本来の面貌がどのようなであったのかを窺うにはかなり困難な面があると思われる。<sup>(26)</sup> 原碑を直に参観して感じたことであるが、碑の上半は比較的状态が良かったため、宋拓ならば上半部において本来の姿を多少なりとも窺うことができるのではないかと考える。ただし、この拓は文字の周囲に塗墨がほどこされているため、字口があいまいな点もあることは否定できない。これらの事情を踏まえ、た上で総合的に判断しなければならないが、線質は多宝塔碑より重厚で結構は方正、行間よりも字間を詰めて書いていることがわかる。この字間の詰め方は、のちの元結碑や顔氏家廟碑に共通している。この時期、顔法の骨格はすっかり定着したものといえよう。

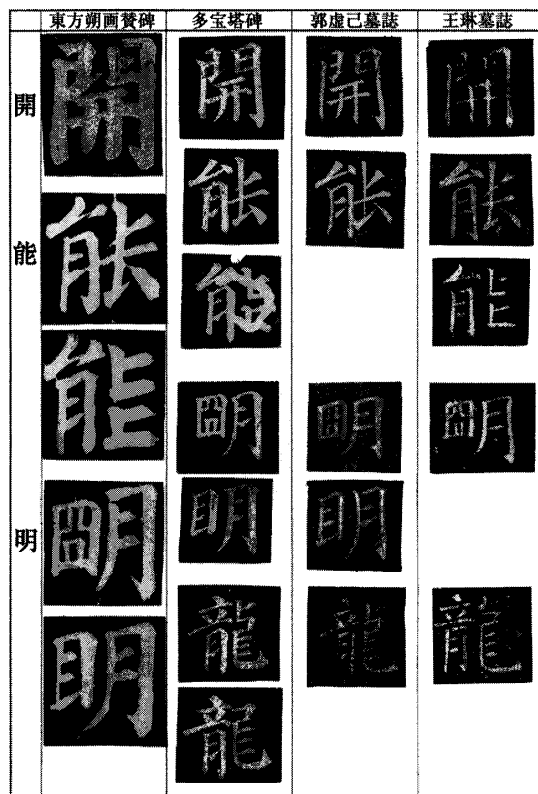
四碑誌を比較した表をみてみよう(図九、図十一)。王琳墓誌の横画は「年」「無」「真」にわずかばかりであるが、按筆による下方への抑え込みが見られる。しかし、「書」「王」「有」の横画などからわかるように筆法として定着した抑え方ではない。郭虚己墓誌になると、按筆はかなり顕著になり、多宝塔碑では一段と強く抑え込んでいることがわかる。東方朔画賛碑は筆線が全体に肉太になり、沈着する。転折から堅画に移る「書」「真」「有」は用筆法において郭虚己墓誌と多宝塔碑とは接近している。「之」「道」の二字を比較してみよう。郭虚己墓誌の「之」字の三画目の起筆は左へ大きく張り出す。「道」にはこうした特長はないが、多宝塔碑になると「之」「道」いずれも顕著になる。「開」の第六画目の



図十



図九



図十一

豎面の趨法は王琳墓誌、郭虚己墓誌とも楮法に見られるような抑揚が窺えるが、多宝塔碑から東方朔画賛碑へと向かうにつれて、中鋒平正の要素が見受けられるようになる。ところで碑誌に複数の字形を用いているものがある。例えば、「能」「明」「龍」などである。顔真卿の用字意識は唐代の他の名家と異なり、正字使用指向が晩年になるにつれて濃くなる<sup>(27)</sup>ことが指摘されている。早年の碑誌では、二つの字体を混用している例が見られることから正字意識に関してはまだ試行の段階といえよう。

まとめ

三三歳に書いた王琳墓誌には唐代の名家の筆法、とりわけ楮法や虞法などの影響を垣間見ることができ。が、顔法特有の按筆や趨法、波法、

あるいは「蚕頭燕尾」の萌芽はいまだ見られない。書者より刻者の力量の差や好尚の違いからくる問題も考えられないわけではないが、同一人物の書いた他の墓誌の書法風格に明らかな違いが見られるということは確実であり、したがって刻者の問題は、わずかな誤差の範囲内と考えてよからう。もつとも、米芾は「石刻は学ぶべからず。但だ自ら書して人をして之を刻せしむるにすでに己の書に非ざるなり。」といい、さらに顔真卿を引き合いに出し、「毎に家僮をして字を刻せしむ。故に主人の意を会す。波撇を修改して大いに真を失するを致す。」と指摘している<sup>(28)</sup>。

が、少なくとも早年の書にはこうした見方は無用であろう。四二歳の手になる郭虚己墓誌は、褚法・欧法の影響であろうと考えられる痕跡はあるものの、横画の按筆や磔法・右払いに燕尾の筆法がわずかながら窺える。用筆法のリズムから考えれば顔法の萌芽といえよう。ただし、多宝塔碑ほど肉厚ではないし、顔法もいまだ定着していない。これが二年後の多宝塔碑になるとかなり顕著になってくる。

以上をまとめれば、三〇代と四〇代の間顔真卿の筆法上、大きな変化があったことを認めなければならぬ。劉濤氏は「前期の楷書はおよそ三変」と見ているが、資料が少ないため、この考え方に無条件で賛同することは控えたい。王琳墓誌を得た現在、少なくとも二分することは可能である。顔真卿の前期をさらに細分化するならば、①「初唐の名家の影響残存期」と②「顔法の萌芽期」とに二分するべきであろう。王琳墓誌は初唐の名家の影響が用筆や結構のあちこちに残存している時期の好例である。また顔法の萌芽期の年代については資料不足から断言でき

ないものの、三〇歳代後半から郭虚己(四二歳)以前の間には芽生え、四四歳の多宝塔碑ではほぼ方向が定まったと考えられる。今後、顔真卿の早年の作がさらに出土すれば、このことは一層明らかとなるう。

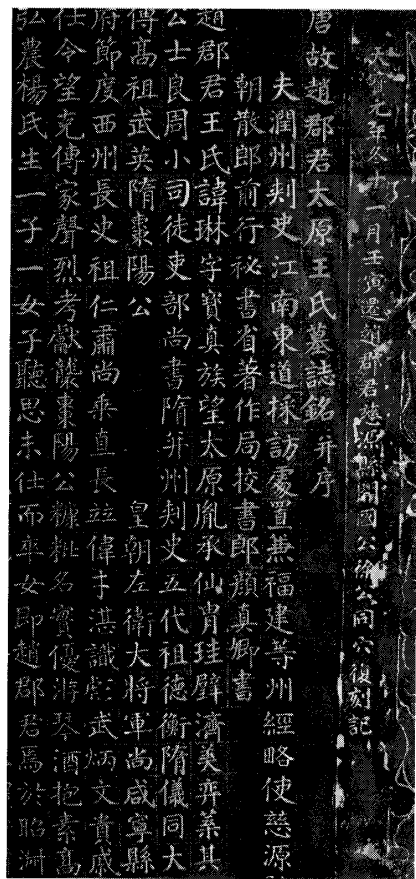
最後になったが、本稿は平成一七年度の跡見学園女子大学特別研究助成費給付を受けて研究調査した成果の一部である。ここに記して関係各位に感謝申し上げる。

(二〇〇五年十一月稿)

附記

脱稿後、王琳墓誌の復刻が出土していたことがわかった。それも単なる復刻ではない。夫の徐嶠の墓葬時に制作されたものである(図十二)。つまり、夫人の王琳を埋葬した一年後、夫の徐嶠が亡くなり、その埋葬時に王琳墓誌の復刻を作って埋めたのである。これによって王琳墓誌が偽刻ではないかとみる考えは完全に否定された。夫の墓葬に際し、夫人の墓誌をなぜ復刻したのか、その理由についてははっきりとはわからないが、復刻した墓誌はかなり精巧に作られていて、

図十二 王琳墓誌  
(右側面に「天寶元年冬……徐公同穴復刻記」と刻している。)



一見しただけでは原刻と全く区別がつかない。ただ、墓誌の右側面に、楷書一行で「天寶元年冬十一月壬寅遷趙郡慈源縣開國公徐公同穴復刻記」と二七文字を刻している。管見するところ、このような事例はおそらく初めてのケースではないかと思われる。なお、この情報については本学名誉教授の西林昭一先生から提供していただいた。ここに記して感謝の意を表したい。ちなみに、王琳墓誌の復刻と徐嶠墓誌は、二〇〇三年の秋、河南省洛陽市洛龍区龍門鎮張溝村から出土し、現在、洛陽師範学院に収蔵されている。徐嶠墓誌の大きさは八九cm×八八cm。誌文は四二行、満行四三字、劉迅の撰、劉絵の書である。

## 注

- (1) 杉村邦彦氏は、顔真卿の為人の場合、これまで剛直の語で批評されてきたことの根拠を認めながらも、「彼本来の性格は、むしろ（弘裕）であった」ことを指摘している。（『顔真卿論』『書苑彷徨』第二集所収・一九八六年・二玄社）
- (2) 偃師商城博物館に現在収蔵されている。偃師商場博物館は偃師市の商城東路五二号にある。偃師市立博物館で、その陳列には夏商王都文明展として国内外の研究者から注目されている。また碑碣墓誌も多く収蔵している。
- (3) 王琳墓誌の出土地ははっきりしているが、収蔵者名は明らかにされていない。未確認の情報によれば、盗掘で得た墓誌であるからだといえる。
- (4) 蘇軾『東坡題跋』卷四（書唐氏六家書後）
- (5) 『顏真卿志』（山東人民出版社、一九九八年）。なお、内容の全く同じものが、『山東省志・諸子名家志・顏真卿』として同出版社から翌年出版されている。
- (6) 何漢儒『書法叢刊』二〇〇五—三、文物出版社。
- (7) 徐嶠は、父の堅に次いで学士となり、祖父より三代続いて中書舎人となった。新出土の（徐嶠墓誌）によれば、字は仲山という。洛陽から新たに出土

した（桓臣範墓誌）は徐嶠が開元二十七年（七三九）に撰じたものである。が、天寶元年（七四二）に徐嶠は卒した。つまり、（桓臣範墓誌）と（王琳墓誌）とは徐嶠の晩年の作といえる。

- (8) 注6に同じ
- (9) 樊有昇・鮑虎欣「顔真卿撰書『唐工部尚書郭虛己墓誌』」（『書法叢刊』、文物出版社、二〇〇〇—四）。
- (10) 注6に同じ
- (11) 劉濤「顔真卿（郭虛己墓誌）相關問題的探討」（『書法叢刊』、文物出版社、二〇〇二—二）
- (12) 郭虛己墓誌の刻年については、『書法叢刊』（二〇〇〇—四）の樊有昇・鮑虎欣両氏は「天寶八年」としているが、劉濤氏は五つの理由を挙げ、天寶九年と断定している。（『書法叢刊』、文物出版社、二〇〇二—二）後者に従う。
- (13) 趙明誠『金石錄』卷七—8a
- (14) 顔真卿楷書の發展過程について三期に分類する見解はほぼ共通しているが、年代の区分に多少違いがある。金開誠は、五〇歳以前を前期、五〇歳—六〇歳を中期、六〇歳以後を後期とみる。王景芬は、中期を五〇—六五歳、後期を六五歳以後とみる。朱開田や殷蔭は、五六歳以前を前期、五七歳—七一歳を中期、七二歳以後を後期とみる。いずれも前・中・後の三期に分類することには違いない。
- (15) 李後主李煜のこと。魏泰撰『東軒筆錄』卷一五所収。
- (16) 米芾『海岳題跋』卷之一「跋顏平原帖」
- (17) 歐陽脩『集古錄跋尾』卷七—15「唐杜濟神道碑」
- (18) 澤田雅弘氏は、一墓誌の書を複数の刻工が分担して制作する例を具体的に指摘している。（『国際書学研究』二〇〇〇）菅原書房）
- (19) 注17に同じ
- (20) 黃庭堅『山谷題跋』卷四「題徐浩碑」
- (21) 『蚕頭燕尾』の語は、米芾『海岳名言』や『宣和書譜』に見える。
- (22) 西林昭一「顔真卿の字と書法」（『顔真卿書蹟集成』東京美術・一九八五



年)

(23) 王澐『論書臚語』(論古)に「宋人以為えらく、顔は楮より出づると。此の理、悟るべし。」と述べ、これに続けての語である。

(24) 注11に同じ

(25) 注6に同じ

(26) 宮崎洋一「顔真卿書『東方朔画賛碑』に関する主な題跋・著録の整理について」(『書論』第三一号、一九九九年、書論研究会)には、東方朔画賛碑を題材にして「碑石の変化や翻刻の広まりと顔真卿の書風に対する印象の変化は、互いに大いに関係しながら定着していった」とする見解がある。

(27) 注22に同じ

(28) 注16に同じ

図版出典

図一 『書法叢刊』文物出版社 二〇〇五—三

図二B 『書法叢刊』文物出版社 二〇〇〇—四